

「仏教文明と東アジアの地域研究」部門主催 公開講演会報告

日時：2015年6月27日（土）14:00～17:00

場所：戸山キャンパス 36号館 681教室

演題：唐草文の新研究

講師：姜友邦（カン ウバン）

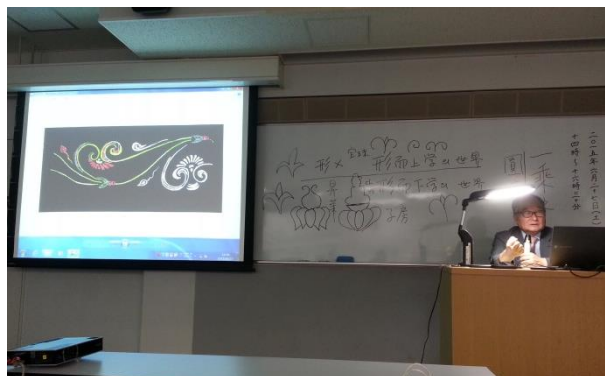
（前韓国国立慶州博物館長、前梨花女子大学客員教授、一郷韓国美術史研究所長）

韓国を代表する仏教美術史研究者である姜友邦氏による公開講演会を開催した。講演は日本語でおこなわれ、要所の通訳は文学研究科博士後期課程の韓普景がおこなった。また、司会進行は文学学院の肥田路美がつとめた。

講師の姜友邦氏は、ソウル大学を経てハーバード大学で美術史学の博士課程を修め、30余年間にわたって韓国国立中央博物館、国立慶州博物館に在職、その後2000年から梨花女子大学人文科学大学美術史学科客員教授を務め、現在は一郷韓国美術史研究所を主宰して精力的な研究・執筆活動を続けておられる。このたびの講演は、この15年来姜氏が取り組んで来られた、主に東アジアの仏教美術に見られる装飾的図様の構成原理とその根源的意味に関する探究の成果であるが、それは同氏の50数年間に及ぶ美術作品の調査・研究の集大成とも呼べるものであった。

はじめに百済の帝釈寺址出土の瓦当と軒平瓦を例に、姜氏が編み出した彩色分析法を用いて段階を追って順次図様を解析、従来一般に唐草文・鬼面文と称されているその図様が、核となる小円形から派生して伸張する複数の曲線とその分岐点に生じる芽形から成る基本的要素（造形言語）の複雑多様に繰り返された結果であることを明快に示された。姜氏はそうした核となる円形や芽形を靈気の集積である宝珠とよび、派生する曲線を靈気の発散・展開と捉える。彩色分析の対象は、三国時代の各種の瓦、新羅時代の聖徳大王神鐘を初めとする梵鐘の各部のレリーフ、高句麗古墳壁画、高麗時代の仏画、李朝時代の青花磁器の文様、慶尚北道金泉市の直指寺仏堂の須弥壇浮彫と、各時代のさまざまな作品に及んだが、それらに表された図様や文様の生成・展開原理の考え方は、ほぼ上記の筋道に同様である。ただし、核となる靈気の集積体は、宝珠のほかに時には満瓶、時には龍などの形態を示し、いずれにせよ生命の源たる水のイメージに帰納するとする。これは、たとえば宝珠と同一視された仏舎利に関する信仰や造形を考える上でも、たいへん示唆に富む。

いわゆる唐草文を植物と見るのは形而下の見方であって、唐草、パルメット、アカンサス等と称するのは意味をなさない



との指摘は、たいへん説得力があり、常に生成増殖を重ね、流動して変化する相こそこれらの図様の本質であること、中国における気の概念や形象に通ずるこうした要素が仏教美術の基底にあることが、あらためて明瞭に理解できた。

（文責：肥田路美）